空気調律師

ひゅう

引用

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひてやゝ年も暮、春立てる霞の空に、白川の関越えんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつづり笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

　草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱にかけおく。

松尾芭蕉 - 『奥の細道』より引用

空気を読む民

　この国では空気は「読む」ものであるらしい。
　私は驚いた。これまでたくさんの国をたずねたことがあるが、空気を「読む」対象にしているのはこの国だけである。
　空気に文字でも書いてあるのかとおもえば、別段そういうことでもないらしい。いたって普通の透明。
　もしかして、私の目が悪くて、空気に存在している文脈というものを理解で来ていないだけか、と不安になったが、この国の民に聞いてみても、とくに目に見える物というわけではないという答えが返って来た。不思議である。見えもしないものを読むことなどできるはずもないのに、なにか涙ぐましい努力の結果、国民は、あたらしい文字でも覚えるみたいに空気を読むことにいそしんでいるようである。

　私がその土地に初めて足を踏み入れたのは、かれこれ半年ほど前のことになる。
　私は、本国での国家試験に合格して、晴れて現在の職業に就く事を許され、一年ほど修行をしたのち、ここへやってきた。
　この国はまだ発展途上で、なにもかもが本国より遅れていた。しかし、彼らは努力をおしまず、かといって、疲れた顔などをみせずに懸命に働いていた。
　半年の間に、著しい成長を遂げて、いまや世界が注目する有望な国家として、その名を馳せている。